派遣留学生としての事前の学びを、どのように支えるか

-山口大学国際総合科学部の事例-

Preparation Support for Students Going Abroad: A Case of the Faculty of Global and Science Studies, Yamaguchi University

山口大学国際総合科学部　**山本　冴里**

YAMAMOTO Saeri

(Faculty of Global and Science Studies, Yamaguchi University)

キーワード：交換留学、英語、多言語、TOEIC、フィリピン、海外留学

１．はじめに

山口大学国際総合科学部（以下 FGSS）は、大学の創起２００周年である 2015 年に開設された。この新しい学部が育てようとする人物像は、「文理の枠を超えた基礎的な知識を持ち、また、多種多様な文化や価値観を理解し、日本語・英語をツールとした高いコミュニケーション能力と課題解決能力を有した人材[1]」である。２年次後期から学部学生全員に課されている交換留学（原則的に一年間）への参加は、既存の枠組みを問いなおし、「枠を超え」、「境界を超え[2]」る人物を養成するための主要な手段のひとつとして位置づけられている。本稿では、交換留学生としての派遣とその学びを支える仕組みについて、山口大学 FGSS の事例を報告する。

なお、学部開設から一年を経たにすぎない本稿執筆時点（2016 年４月）においては、一期生もまだ２年次前期の授業を受け始めたばかりであって、交換留学に出発していない。そのため本稿では、とくに派遣前の教育的措置を中心に記述する。

[1] 山口大学国際総合科学部ホームページ<http://gss.yamaguchi-u.ac.jp/history/>（2016 年 4 月 7 日）
[2] 学部パンフレットより

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

２．山口大学と交換留学

留学生の送り出しや受け入れがもたらす価値としては、国際的な競争力の増加・経済成長・受け入れ国や地域に対する好意的な人材の育成など、極めて多様なものが報告されている[3]。OECD 加盟国を中心に世界的な留学生獲得競争の起こるなか、日本政府もまた、2020 年を目途に３０万人の受け入れを目指すとともに、１２万人（2011 年比でほぼ倍増）を派遣する計画をかかげている。こうした計画に牽引されて、日本の留学生数は受け入れ・派遣ともに増加しつつあり、都市部の大学を中心に、留学生と知り合い共に学んだり、あるいは自身で留学に出発したりする機会は、徐々に一般的なものとなってきている。

ところが山口大学の場合、FGSS 開設以前には、全学での学部留学生在籍率は１%に満たなかった[4]。また、交換留学に出発する学生の数も年間で２０人程度と、学内では、留学経験自体がまだ極めて珍しいものにとどまっていた。だが、FGSS に所属する学生全員が交換留学に出発する 2016 年秋以降は、正規生の交換留学者は従来比で約５倍となる。仮に同じ数だけの留学生を受け入れることができれば全学での学部留学生在籍率も２%を超える。さらには他学部学生への波及も期待ができることから、FGSS 全員留学の効果は、実際にはこうした数字以上のものになると考えられる。

しかしその一方で、これだけの数の学生の派遣と受け入れを支える仕組みは、従来、本学は持たないものであったし、現在も試行錯誤しながら組みあげている最中である。そうした仕組みづくりには教育環境の最適化、制度に関わる条件（単位互換の仕組み、交換留学枠の獲得）の整備、物質的な条件（受け入れる留学生の寮や教室）の整備、人的リソース（英語能力が高く、留学制度に詳しいアドバイザーや事務職員）の配置など様々な側面が考えられるが、以下では、とくに、学部正規生に対する教育環境の最適化という点から、交換留学生としての学生の派遣を実現し、留学中の彼らの学びを支えるための、派遣前における教育的な仕組みを見ていく。具体的には、これはおおむね次ページ図１の「短期語学研修（１カ月）」「海外留学（１年間）」および「コミュニケーション科目」部分前半に相当する。

３．外語でのコミュニケーション能力を育てる（留学前）

留学中の学びを有意義なものにするためには、外語でのコミュニケーション能力の発達が必須である[5]。FGSS の学生は、留学中、派遣先がどこであれ、基本的には英語で授業を受ける。したがって留学前の英語能力伸長が、初年次の極めて大きな課題となっている。その一方で、協定校の８割以上が

[3] 日本の場合の留学生受け入れ効果については、佐藤（2010）に詳しい。
[4] 2015 年 5 月 1 日現在で正規生・交換留学生を合算した数字であり、より正確には 0.94%程度である。
[5] なお、ここでは敢えて「外国語」ではなく「外語」としている。「母語」と対になるものとして「外語」のほうがふさわしいと考えるからである。現代の日本語において、「外国語」は一般的なものとしてあるが、「外語」はそうでないということの問題点については、山本（2010）に詳しい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

非英語圏に位置していることから[6]、学生たちは、留学中は多かれ少なかれ、日本語でも英語でもない、もうひとつ（あるいは２つ以上）の言語とかかわりを持つ生活を送ることにもなる。そのため、英語以外の外語に関する取り組みも必要となる。

図１　カリキュラム概念図

３．１　ＴＯＥＩＣの活用

FGSS では、入学・留学・卒業など、大学生活における幾つもの節目で TOEIC を利用する。入学時の TOEIC 利用こそ、取得点数により入試結果に加算するというオプショナルなものに留まっているものの、留学時・卒業時には、TOEIC の一定程度の点数取得は必須である。留学時には最低条件として 600 点が[7]、卒業要件には 730 点が課されている。

協定校とのやりとり等に必要な時間を考慮すると、２年次後期から留学に出発するためには、実質的には、１年次２月が 600 点を取得するための最終期限になる[8]。2015 年度に入学した一期生の場合、入学直後６月時点での TOEIC 平均点は 553.7 点であった。大幅な点数の引き上げが必要となったことから英語を学ぶための通常授業（１年次は４コマ～５コマ／週[9]）のほか、TOEIC 対策講座、補講が開講された。さらに、鍵となる方策として位置づけられているのが、次項で報告するフィリピンでの短期英語研修への参加である。

３．２　フィリピン短期語学研修

フィリピンは、近年、北東アジアの英語教育産業のなかで、年々存在感を増している。マンツーマ

[6] 2015 年 12 月現在。
[7] なお、この 600 点という点数は、あくまでも FGSS としての規定である。これに加え、当然ながら留学先から課される条件（GPA、IELTS など）がある。
[8] ただしこれは 2015 年４月入学生の場合であり、翌年度以降の最終期限は、本稿執筆時点では決定していない。
[9] 選択科目を含む。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ンで安価に英語教育を受けられることや、地理的な近さから、日本をふくむ北東アジア諸国からフィリピンに向かい、英語を学ぶ若者たちが増加している。FGSSでも、単位化こそされていないが、2015年は、１年次在籍生104名中100名が、８月末から９月末にかけての約一カ月間をフィリピンで過ごした。

滞在の前後を比較すると、TOEICの点数は平均して543.3点から630.2点に上昇しており（72.8点の伸長）、終了後のアンケート結果を見ると、授業への高い満足感をはじめ[10]、単純なTOEICの点数・英語能力の伸長というばかりでない成果も見受けられ、有意義なものであったと考えられる。後者については、５項内で後述する。

３．３　英語以外の外語能力

FGSSの学生たちは、入学前には英語以外の外語（以下LOTE: Languages Other Than English）学習経験をほとんど持たず、しかも、初年次に、LOTE授業を受けられる環境はない。２年次前期にも、英語をのぞいては、提供される授業は中国語・韓国語のみである。もちろん、予算も限られ、また学生たちの留学先現地の言語が多岐にわたるなか、LOTEの授業数を増やすことは難しい。その一方で、何もしないまま送り出してしまっては、学生に対して、LOTEは不用かつ余分なものだ、というメタ・メッセージを送るも同様だ、ということも言えよう。彼らの直面する現実的な困難も、大きな――場合によっては乗り越えがたいほどのものになってしまうかもしれない。したがって学生には、自律的に外語を学ぶためのスキルを教え、同時に、言語の学習や習得に何が賭けられているのか、という社会的な意味を伝えることが有効であると考えられる。

そうした目的のために開講されているのが「言語学習の理論と実践Ⅰ」(1年次必修)クラスであり、そこでは外語学習の社会的な意味を論ずるとともに、欧州で開発されたCARAP(Cadre de reference pour les approches plurielles des langues et des cultures：言語・文化への多元的アプローチのための参照枠[11]）を参考に、様々な学習ストラテジーを体験する機会が提供されている[12]。

３．４　授業外での様々な活動

授業の枠外でも、外語コミュニケーション能力を育てるための様々な取り組みがなされている。英

[10] 授業に対する評価は、「１:不満、２:どちらかというと不満、３:どちらかというと満足、４:満足」のうちから一つを選ぶというもので、平均３．７であった。参加者100名のうち85名が回答。
[11] CARAPについては、ヨーロッパ現代語センターが専用のインターネットサイトを開設している。<http://carap.ecml.at/Documents/tabid/2668/language/fr-FR/Default.aspx>（2016年4月17日検索）日本語で読める関係資料には、大山（2016）がある。
[12] この授業前後で行われたアンケートを比較すると、「自分にあった第二言語・外語学習の方法を持っている」とした学生は36.5%から59.6%に、「新しい第二言語・外語をうまく学べると思う」と答えた学生は59.5%から75.8%に増えており、前掲のような意味を持つ教育活動として、一定の成果を出すことができているものと考えられる。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

語については、English Space（授業のない時間に、英語で話すための場を設ける）、E-Box（当該の部屋では、誰でも英語で話す）、English Life（English Life のカードをつけた学生や教職員は互いに英語で話す）といった試みが、学部開設から2016年4月現在までの1年強のあいだに、教員あるいは学生の発案で実施された。学部創設期だからこそと言えるのかもしれないが、本稿筆者には、FGSSには、学生が新しい提案をしやすい環境が、また教員の側にもそれを積極的に支えようという雰囲気が醸成されつつあるように感じられる。

このほか、全学の学生が利用できるものとして、図書館にて「言葉のアトリエ」という活動が定期的に行われ、留学生のチューターと様々な言語で会話をする機会や、自律学習の相談をする機会を提供している。また、留学生の言語パートナー紹介（互いの言語学習を支えあうTandem学習を行う）もここで行われている。これは、交換留学前に行き先の環境で最も使われる言語を学んだり、具体的な生活情報を得たり、何より、気負いなく留学生と――ひとりの知り合い、さらには友としてすごすために、有意義なものとなっている。

４．留学生とともに受ける授業

前項では外語コミュニケーション能力の伸長について述べたが、課題となるのは、言語能力だけではない。本項では、「外国人」と同席するというだけで、緊張したり、身構えてしまうことの多い入学当初の学生を、どのように「様々な文化背景を持つ人々と理解しあって、共に活躍することができる[13]」よう育てていくのか、という点からFGSSの試みについて記す。ただし、以下の授業はいずれも2年次以降に設定されているために、本稿執筆時点では未実施である。実施された後の状況や課題については、後に別稿を立てて報告したい。

４．１　多文化コミュニケーションセミナー（留学前）

留学直前のクオーター（2 年次クオーター2）で開設される授業である。「一般学生と留学生がグループ活動を通してコミュニケーション能力を養い、背景文化が様々な人と協力しながら活動する力を身につける」ことを念頭に、毎年異なる活動が計画される。留学生に対する日本語レベルの点からの受講制限は無く、したがってこの授業に参加するにあたっては、学生たちは日本語と英語双方を駆使することが必要となるはずである。教員も話す言語と（パワーポイントなどで）文字で示す言語を変える（どちらか片方を日本語に、もう片方を英語にする）ことを予定している。

実施初年度となる２０１６年は、新聞サイトの「国際面」を比較するという活動が行われる予定である。世界の様々な地域で発行されている新聞の「『国際面』を読み、それについてディスカッション

[13] FGSSホームページ<http://gss.yamaguchi-u.ac.jp/philosophy/>より、「コミュニケーション能力と協働力」の記述（部分）

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

をすることを通じて、地域やニュースサイトによる傾向や互いの違いを分析し、自ら問いを立て考える[14]」ことが目的だ。本稿筆者の考えでは、「自ら問いを立て」ることは、大学入学以降の学びの根幹をなすものである。この授業は、山口大学の学是「発見し・はぐくみ・かたちにする　知の広場」の具体的な表れのひとつとして、また本稿冒頭に述べたような力を持つ俊英を育てようとする試みの一環としても重要である。

４．２　半数近くの授業が英語での実施に（帰国後）

FGSSでは、学部の授業全体の３割以上を英語で実施するという方針を立てているが、現実的な理由から、その多くは、学生たちが交換留学より帰国した後に設定されている。そのため、その３年次後期から卒業までの間に英語での授業が集中し、この間に開講が予定されている授業のうち、コミュニケーション関係科目を中心に、約半数の授業において、教授言語が英語となる（全６２科目中、英語のみで開講される科目３０科目、英日両言語を用いて授業の実施される科目６科目）。

FGSSでは、受け入れる交換留学生に日本語レベルの点からの制限を課さない。したがって、教授言語を英語とする／教授言語に英語を含むこうした科目には、より多くの留学生が参加することが予想される。一般の学生にとっては、これは留学中の学習環境とある程度近似した環境が継続するということを意味する。

５．　まとめに変えて――旅に出る若者たちに

留学とは、長い旅でもある。作家アルベート・カミュは「旅の価値をなすもの、それは恐怖だ。その証拠に、自国や自国の言葉からあまりにも遠くにいると、ふとした瞬間に、ぼくらは漠とした恐怖にとらわれ、本能的に元の習慣の中に避難したくなる（中略）。それはまごうかたなき旅の収穫だ。そんなときには、ぼくらは熱っぽく、だが多孔質になる。どんな小さな衝撃にも体の奥底まで揺すられてしまう。滝のような光に遭遇すると、そこに永遠が出現する」（カミュ 1992,p.20）と記している。「多孔質」という言葉について補足すると、原文でカミュが用いているのはporeuxである。多くの穴が開いていて、だからこそ中まで沁みわたる状態だ。留学中、学生たちもまた「多孔質」となるだろう。そして、留学という物理的・社会的移動の経験を経たうえで、山口大学FGSSに戻ってきたとき、そこで目に映るものも、未来の計画も、おそらく、かつてとは異なるものになっているはずだ。

実際、４週間にすぎないフィリピン短期語学研修でさえ、幾人もの学生の、世界に対するまなざしを変えたのではないかと思う。未来の計画についても同様で、最終年次に予定されている課題解決演

[14] 2016年度の「多文化コミュニケーションセミナー」シラバスより。シラバスは以下のアドレスより学外からでも検索可能である。<https://www.kyoumu.jimu.yamaguchi-u.ac.jp/portal/public/syllabus/SearchMain.aspx?>

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

習で、フィリピンのNGOと協力したプロジェクトを立ち上げたい、といった希望も、すでに彼らの一部から提出されている。

留学は、もちろん、より高いTOEICの点数といった、数字として目に見えやすい成果にも結びつくだろう。しかし、そうした簡単に可視化できるものや「予定調和」を超えた何か――場合によっては、人生の軌道を変えることになるかもしれない何かに、「滝のような光」に巡りあう可能性の予感に惹かれて、人は留学という旅に踏みだすのではあるまいか。そうした若者たちに対して、教育機関としてできること。それは、本稿で報告してきたような教育的仕組み作りでもあるが、それだけではなく、何よりもまず柔軟であること――教育機関としての大学・学部もまた、可能性に開かれてある、ということではないかと思う。

引用文献

アルベート・カミュ（1992）大久保敏彦訳『カミュの手帖 1935-1959（全）』新潮社

大山万容（2016）『言語への目覚め活動―複言語主義に基づく教授法』くろしお出版

佐藤由利子（2010）『日本の留学生政策の評価―人材養成、友好促進、経済効果の視点から』東信堂

山本冴里（2010）「「外国語」に対して「母国語」-「母語」の位置関係にある「X語」の提案―フランス語のlangue étrangère概念を足場として」『リテラシーズ』7, pp.21-29.

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.